

第1回千代田区子ども読書活動推進会議 議事要旨

【日時等】

<実施日> 令和6年1月25日(木) 9:30~11:30

<場 所> 千代田区役所6階 601会議室

<出席者> ・子ども読書活動推進会議委員(16名)

野口 武悟(会長)	鴫田 拓哉
庭井 史絵	酒井 邦嘉
青木 裕子	平瀬 律哉(代理出席:勝又 慶)
石川 剛	岡本 光晴
早川 淳	茅野 由紀
澤村 智子	堀越 勉
木村 恭子	小宮 三枝子
倉掛 秀人	佐藤 尚久(副会長)

・オブザーバー(6名)

【行政関係者】

子ども部	子ども支援課長	湯浅 誠
子ども部	指導課長	山本 真(代理出席:小峯 惣太)
地域振興部	商工観光課長	高橋 昌弘

【図書館関係者】

ゼネラルマネージャー	後藤 慎治
読書振興センター長	神田 守章
四番町図書館長	栗田 孝子

・事務局

地域振興部文化振興課長事務取扱
地域振興部参事 加藤 伸昭 外3名

<欠席者> ・子ども読書活動推進会議委員(2名)

難波 明夫 野村 公郎

・オブザーバー(1名)

【行政関係者】

子ども部 児童・家庭支援センター所長 吉田 啓司

【資料】

—当日配付資料—

- ・ 第1回千代田区子ども読書活動推進会議 議事次第
- ・ 千代田区子ども読書活動推進会議 委員名簿【資料1】
- ・ 千代田区子ども読書活動推進会議設置要綱【資料2】

—事前配付資料—

- ・ 第3次千代田区子ども読書活動推進計画
- ・ 第3次千代田区子ども読書活動推進計画 進捗状況調査票【資料3-1,3-2】
- ・ 第3次千代田区子ども読書活動推進計画の成果と課題【資料4】
- ・ 第8回千代田区子ども読書調査報告書

【次第】

- 1 開会
文化振興課長挨拶
- 2 議題
 - (1) 会長・副会長選出
 - (2) 第3次千代田区子ども読書活動推進計画の進捗状況と課題について
 - (3) 計画改定に向けた調査等について
- 3 連絡事項
次回日程
提出書類について

【議事経過】

- 1 開会
<文化振興課長挨拶>
 - ・ 文化振興課長より開会挨拶を行った。
 - ・ 千代田区子ども読書活動推進会議委員の委嘱状を交付した。
 - ・ 第1回目の会議開催に伴い、各委員より自己紹介を行った。
 - ・ 配付資料の確認を行った。
- 2 議題
<(1) 会長・副会長選出>

文化振興課長： 資料2「千代田区子ども読書活動推進会議設置要綱」第5条第2項において、「会長は、委員の互選により学識経験者のうちか

ら決定する」こととなっている。副会長については、第5条第4項において「副会長は、会長が指名する」と規定されている。

会長への推薦はあるか。推薦がないようであれば、事務局案として、文部科学省「子供の読書活動推進に関する有識者会議」の委員を務めていた野口委員を会長に推薦するが、いかがか。

委員一同：（異議なし）

文化振興課長： それでは会長は野口委員にお願いする。
次に、野口先生に副会長の指名をお願いしたい。

会長： 副会長は地域振興部文化スポーツ担当部長の佐藤部長にお願いできればと思うが、いかがか。

委員一同：（異議なし）

文化振興課長： それでは、副会長は佐藤委員にお願いする。

<(2) 第3次千代田区子ども読書活動推進計画の進捗状況と課題について>

文化振興課長： 以降の議題については、野口会長に進行を頂きたい。

会長： では、次第2、議題（2）「第3次千代田区子ども読書活動推進計画の進捗状況と課題について」に移りたい。

「第3次千代田区子ども読書活動推進計画」が、令和5年度をもって計画期間を終了する。計画の改定について子ども読書活動推進会議で検討するにあたり、現時点での計画の進捗状況と、成果・課題を事務局がまとめた。進捗状況と成果・課題について事務局から説明後、委員の皆様から質問・意見等をお伺いしたい。

文化振興課長： 資料3-1・3-2をご覧いただきたい。

第3次計画では、子どもたちの成長過程に応じた取組、読書環境の整備の充実、広報啓発、人材育成支援という大きく4つの項目に分けて取り組んできた。資料3-1が4年間の取組状況を簡潔にまとめたもの、資料3-2は各年度の取組を具体的に記載したものである。資料3-1では、各事業における進捗状況をA「実施できた」、B「ある程度実施できた」、C「ほとんど実施できなかった」、D「実施していない」の4段階で自己評価している。新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、B、Cとなったものもあるが、おおむね計画どおりに実施できたと考えている。

資料3-1, 3-2に示す進捗状況を踏まえて、第3次の成果と課題をまとめたものが資料4である。第3次計画の取組と成果につい

ては、第2次計画の課題を踏まえ、①「特別な支援を必要とする子どもの読書活動の推進」、②「子どもを取り巻く大人への支援」、③「ボランティア活動の支援」の3点にまとめている。

①「特別な支援を必要とする子どもの読書活動の推進」については、学校において特別な支援を要する子どもや外国語を母国語にする子どもへの本を紹介する取組を始めたほか、区立の図書館においても関係団体と連携した読書支援サービスを提供、千代田Web図書館の児童向けコンテンツやバリアフリー図書を充実させ、読書へのアクセスを確保してきた。また、特別な支援を必要とする子どもを持つ保護者への情報提供も始めた。

次に、②「子どもを取り巻く大人への支援」としては、従来どおり、保護者・教職員向けに読み聞かせの講座や講演会を開催した。また、区立図書館司書の子育て・教育施設への派遣も継続し、学校図書館連絡会において、関係者間の情報共有も推進してきた。そのほか、私立学校に対し、読書振興の具体的な取組事例を紹介した。

③「ボランティア活動の支援」については、子どもの読書活動の支援を希望する方々向けにスキルアップのための講座や勉強会を開催し、ボランティア活動の機会の提供に努めた。ただ、コロナ禍においては、ボランティアによる読み聞かせはなかなかできなかった。

その他、新規事業の成果としては、リサイクル本の利用促進、千代田図書館の中高生専用席、中高生専用学習ルームの活用、授業での学校図書館の活用の促進を行ってきた。これらの取組については、一定の成果を残してきたところだが、依然として中学生の不読率が高い現状にある。この不読率とは、調査前月1か月以内に本を1冊も読まない児童生徒の割合である。小学生は令和4年度に4.2%、過去をたどっても5%を上回らないが、中学生になると令和2年度には20%を超えている。小学生から中学生になると不読率が高くなる。これは都内・全国的な傾向と同じである。

中学生が「学校がある日によくすること」としては、クラブ活動、委員会活動が最も多くなっている。次に塾や習い事、メール、ブログ、SNSが31.6%で2位になっている。そうした中、2時間以上本を読む割合は7.4%、1時間から2時間までも6.3%で、非常に少ない状況だと思っている。

また、感染症以降、電子書籍を読む子どもの割合が高くなっており、小学生で38.8%、中学生も27.8%という現状で、子どもたちの読書環境が大きく変わってきていることもうかがえる。

これらを踏まえて、事務局としては、次の2点を第3次の計画

の課題と考えている。第1に、全ての子どもが好きな場所で好きな本を読める読書環境を充実させることで、多様な子どもたちの読書活動の支援として、アクセシブルな書籍等の充実やアウトリーチサービス、またデジタル技術の活用が必要だと思っている。

もう1点が、不読率が上昇する中学生以上の子どもが読書に親しむ・楽しむためのしかけづくりである。全国的な傾向として、高校生は不読率が50%を超える年もあり、中学校から高校生になると本を読まなくなることが国の調査等で明らかになっている。そういった課題に対して、出版関連産業と連携した魅力あるイベント等の実施や、子ども主体の読書活動として、企画や選書に子どもの視点を取り入れることも考えていく必要があると認識している。

会 長 : では、第3次千代田区子ども読書活動推進計画の成果と課題について、委員の皆様から質問・意見等はあるか。

委 員 : いかに関読書を習慣づけるかが肝であり、朝読が読書習慣に大きく貢献していると思う。朝読以前以後の率の推移はどうなっているのか。

委 員 : 朝読書は、例えば8時20分に遅刻のカットポイントがあるため、8時15分ぐらいから座って読書して待っているところから始まっている。また、多くの学校では、学活の事務手続が終わってから1時間目が始まるまで読書をさせている。私も朝読をやっている学校とやっていない学校を経験しているが、やっている学校の子はやはり昼休みや夏休みにも相当読み込む。朝読は読書を習慣化させていると思っている。

千代田区の場合は、神田一橋中は朝読を行っており、麴町中は主体的に判断すれば何をやってもいい時間である。読書している子もいれば塾の宿題をやっている子もいる。今後は、データを見せながら、朝読を推奨していきたいと思っている。

委 員 : 読書時間は、漫画なども含まれての読書時間ということか。

文化振興課長 : 「第8回千代田区子ども読書調査報告書」55ページにて、千代田区のアンケートにおいては、小説や物語、図鑑、辞典、辞書、絵本、地理、地図を読むことを読書としており、教科書、雑誌、ゲームの攻略本、写真集、画集、漫画を読む行為は読書ではないと定義している。電子書籍は本に含ませている。

委 員 : 学校の図書館に置いてある本は、漫画なのか漫画ではないのか

判断が難しい本もあると思うが、今回は入っていないということか。

文化振興課長 : 学習漫画もくくりとしては漫画としている。

委員 : 読書とは何なのかが分からないまま読書活動推進計画というのには違和感がある。何が読書なのか何が本なのかを整理していただきたいが、本から漫画、雑誌を排除しているというのが非常に気になる。写真集や画集というアーティスティックなものについても調査から漏れてしまっている。美術室にある本や画集も、ルネッサンスはこうだったとか、そういうことを含めて明らかに読書の対象になる。教科書を排除していることも問題があり、当然参考書も読書に入っていない。調査するとき、これが本ですこれは本ではありませんという言い方はちょっと決めつけがきつ過ぎると思う。漫画を含めて読書形態の中には入るものであり、精神的な需要に当然資するものであるため、そうではないものをどう排除するかという文言は検討の余地はあるかもしれないが、最初の入り口はかなり広くてよいのではないか。

例えば大学生の場合には、大学生協が毎年調査をしているが、不読率は50%で、これは上昇傾向にある。その定義はと読んでみると、一切定義していない。教科書、参考書含めて全く読まない大学生が50%いるというのはちょっと信じられない。

このアンケートに答えた人たちも、そこら辺をもやもやとした感じで答えているということで、読書計画がうまくいった・いかないという評価にもつながるといえるのは問題である。まず千代田区が模範を示して、読書というのを我々はこういうふうに定義する、というメッセージを出すことも大切だと思う。毎年実施の調査で、突然指標を変えてしまうと連続性がなくなるという問題は生じるが、新たに少し広めのアンケートも取っていくことを考えてはどうか。

また、不読率についても千代田区の推移を比較対象と同時に出していただき、千代田区はどの位置にあるかを示してもらえたほうが、今後の議論がしやすい。次回以降に関連の資料をつけていただけるとありがたい。

文化振興課長 : 今回の提言・意見を踏まえて、指定管理者と協議しながらアンケートの見直しを行いたい。

また、特別区での不読率の傾向については、調査は行っていたが、本日の資料としては用意していなかったため、次回以降の会議にて示したい。

- 会 長 : 文科省の有識者会議でも、読書をどう定義づけるのかという提案・意見が出たが、残念ながらあまり深まらなかった。時間的な制約がある中でどこまで議論できるのかはわからないが、今の問題提起は非常に重要だ。
- 委 員 : 最近オーディオブックも非常に増えている。読むことを前提とすることが読書かとは思いますが、これからも増えていく気はするので、調査の中に入れていったほうがいいと思った。
- 文化振興課長 : オーディオブックは、図書館でも貸し出している。アンケートの中でどう取り扱うのかを考えていきたい。最近多いYouTubeで読書の解説をしている動画など、そういったものをどういうふうに扱うのかも考えていきたいと思う。
- 会 長 : 資料4の裏面、課題のところ、多様な子どもたちの読書活動支援、アクセシブルな書籍等とあるが、オーディオブックも重要な書籍スタイルの1つである。多様性という観点からいうと、目で読むというだけではなくて、耳で読む、点字を触読される方は指で読むといった、いろいろな読書スタイルがある。その辺りの検討、議論もぜひ進めていただきたい。
- 委 員 : 質問が2点ある。1つ目が、成果と課題の評価指標だが、実施状況として計画どおりに実施されたかという評価は行われているが、実施の効果・満足度はどうか。特に大人、先生たちへの取組とか読書推進活動に当たっている方への取組というのが、実際その方たちのニーズに合ったものなのか、満足度はどうかといったアンケートなど、検討する材料はあるか。
もう1つは、高校生の不読率が問題になっているという指摘があったが、アンケート自体は中学生で終わっている。区の実施のため、区立小中校のリサーチが中心になると思うが、在学あるいは在住の高校生たちの状況を知るような方法はあるか。
- 文化振興課長 : 実施の効果については、指定管理者が各学校、幼稚園、保育園、児童館に司書を派遣し、読み聞かせや図書の整理、また先生たちへのアドバイス等をしている中で、学校図書館連絡会を年に2回開催し、派遣先から今後の活動などへのご意見を賜っている。成果・効果をオープン化できていないが、どういう形で委員に共有できるか、検討したい。
高校生への調査については、区内の高校は区立で1つ、九段中等教育学校がある。それ以外は都立と私立の高校で、千代田区の

教育委員会ではなかなか難しいが、4月以降、高校生の年齢の方に対してどういう形でアンケートを取るかを検討し、読書傾向を調査したいと考えている。

委員： 例えば本のリストを作って提供した、本を並べたといったことはカウントしやすい。一方、実際その本はどれぐらい使われたのか、どれぐらいニーズに合っていたのかについては、把握するのが難しいが、それがないといろいろな活動をただ単にやればよいということで終わってしまう。調査の方法を考えたほうがいいかなというのが1点目である。

2点目、高校生はやはり高校という単位で考えるとアクセスが難しいとは思いますが、たくさん的高校生が在住しているので、学校という枠組みを通さなくても、彼らがここに住んで生活している中での本との接触とか読書活動というものにどうリーチしていくかというのは、検討の余地があると思う。

会長： 子どもの読書活動推進については、成果をどう評価するのかという難しさがあり、どうしても不読率を表に出してくるところがある。その指標は1つの見方としてはもちろんあるが、量的な側面だけではなくて、読むことの質的な側面を捉えるような観点というのをうまく盛り込めるとよい。数字で表れる部分というのを強調しがちだが、読書は内面に働きかける作用であるから、単純に量的なものだけでは測り切れない部分もある。その部分についてもしっかりと捉えて位置づけていくことが重要かと思う。

委員： 基本的に効率とか数で評価してはいけないと私は強く思う。人より速く本を読んだところで何のメリットもない。冊数を稼ぐというのも目に見える成果だが、同じ本を繰り返し読むことも実は非常に効果がある。冊数に踊らされて実態が見えないようではいけない。

調査項目の「大切な本や忘れられない本がありますか」は非常にいい項目で、小学生7割がそういう本がある、中学生は6割だとか、こういうものも伸ばしていくというのが、精神的な目標になろうかと思う。たった1冊でもかけがえのない本があることで、自分は逆境でも負けずに生きていられるのだとか、そういうのは読書の精神的な効用なので、目に見えないものを目に見えるようなアンケートの結果にしていくというのも、非常に大きなメッセージ性を持つと思う。

それから、これだけネット情報が増えている中、さっきYouTubeの話もあったが、書評サイトとか、あとはネット記事を読んでい

るという時間が非常に長くなっている。ネット記事を読むのは読書と言わないと私も思うが、製本されているものを一次資料として読むということを、このアンケートに参加する生徒さんにも分かりやすい形で言うことが大事で、もうちょっと説明を加える部分があってもよいかと思う。ゲームの攻略本と一蹴しているところも、やはりスポーツとかボードゲームとか、そういうものの歴史やそういうものの戦略的な思考を深く読み取って、例えば将棋の棋譜が書かれている本とか、そういうものも含めて読書になると私は思う。趣味性の強いお子さんが「全然読書にカウントされないのか」とがっかりして、アンケート自体に興味を持たなくなることは避けたい。

副 会 長 : 仕事をしていく上で、現行の計画に基づいて事業を組み立てて推進しているわけだが、計画も何をやる、かにをやると書いてあって、それをやりましたやりませんでしたというのは最終的なアウトプットで、成果としてどうあったかというのは我々として見ていく必要があると思う。

もう1点いうと、近視眼的に子どものうちに読書をさせるためにどうしたらいいかというだけの考えではなく、その先に何かがあるのか、子どものうちに読書をすることによってどんな大人に成長してほしいのかとか、そういう視点があったほうがいいと思う。子どもの頃から本を読んでいけば、大人になっても本を買ってくれるだとか、新聞を読んでもくれるだとか、そういうつながりもあると思うし、最終的にどういう大人に育ていくためにこの読書がどういう影響を及ぼしていくのかというのは、1つの最終的なゴールとして、ぼんやりでもいいから計画の中で見えるようにしていけたらいいかなと思う。

文化振興課長 : 教育の計画もこれから定める予定になっている。教育委員会として、千代田区の子どもたちにどういう大人になってもらうために施す教育かといったところを、1つのテーマにして策定する計画だと聞いている。教育の計画における最終的な姿を基にしながら、子ども読書活動推進計画を策定していきたいと思う。

会 長 : 子どもの読書を推進しましょうとか、子どもたちにぜひ本に親しんでもらいたいというのは大人世代の願いとして当然あるわけだが、一方で、大学生でも不読が5割だとかという状況を捉えると、実は大人も半分くらいは読んでいないのではないかというデータもある。子どもに読め読めと大人が言っても、その大人が読んでいないというのは説得力がなくて、実際私も市民向けの講

演会が終わった後、小学生くらいの男の子が来て、実は僕のお父さんは本を読んでいないのに僕には本を読めと言うと聞いた。子どもの読書を進めようと思ったとき、大人の読書も進めていく視点を併せ持っていないといけないのではないか。トータルな意味での文字・活字文化をどう広めていくのかが重要と思う。

委員： 千代田区の不読率の推移のデータに加えて、ほかのところでは子どもの読書活動推進としてどういうことをやっているのかといった事例も用意していただけるとありがたい。

あとは、計画の成果と課題を読んだ感想になってしまうのだが、リサイクル本の活用推進が新規で目立っていて、そもそもどういう本がリサイクル本として提供されるのか、それは長期的にうまく回っていくものなのか、そういう心配もしてしまった。

文化振興課： 他の自治体での読書活動推進事例も、データとともにご提示したい。

リサイクル本については、懸念が現実のものとなっている。四番町図書館の新しい施設を整備する間、仮施設に移る際に、どうしても除籍せざるえなかった大量の本をリサイクル本として提供しており、そろそろなくなってしまふ。以降どうするかが課題となっている。今後、計画にどう落とししていくのかは検討したいと思う。

委員： おととい、かがやきプラザの千代田区社会福祉協議会から電話があり、リサイクル本・紙芝居があるから使えるかどうか見てほしいということで、この後行くことになっている。紙芝居は買うのもお金がかかり、絶版になるのが早い。読みたくてもなかなか手に入らなかったりするので、特に手に入らないような本とか、あと図書館の本でも出されている本以外にバックにある本とか、そういう本のリサイクルはぜひしていただきたい。

会長： まだご意見があるかと思うが、既に議題（３）についてのご質問等も多々出ている。次の議題について事務局より説明いただいてから、引き続きご質問等をお寄せいただきたい。

また、今日の時間内では、意見・質問等が出尽くさないと思う。会議終了以降に事務局からフォームを送るので、追加の質問・意見をご記入いただき、次回会議に事務局からコメントする形にしたい。

<(3) 計画改定に向けた調査について>

会 長 : 議題(3)「計画改定に向けた調査等について」、第8回千代田区子ども読書調査報告書に基づいて、事務局からご説明をお願いしたい。

文化振興課長 : 第8回千代田区子ども読書調査報告書、概要版を御覧いただきたい。

第1章では「調査の概要」を記載している。区立の小中学校に通う子どもの読書の状況や変化を把握し、今後の読書活動推進に関する施策に活用することを目的とし、調査で把握した状況を公表することで読書に関する子どもたちとそれを取り巻く大人たちの関心を高め、読書推進につなげるという目的で行っている。

調査対象、調査方法は、区立の小中学校または中等教育学校の前期課程の児童生徒、各校各学年の1クラスにアンケートを配付し、回収をしている。例年11月に実施し、回収結果は小学生が大体9割、中学生も87%の回収率となっている。対象者の属性は、小学校1年生から3年生、また4年生から6年生、中学生で分けている。

「読書について」として、読書の好き嫌い、本を読む頻度、読んでいる本の分野や本を読む理由、また読まない理由があり、(6)が前の月に読んだ冊数で、不読率の結果につながっている。電子書籍の利用状況、小学校前に本を読んでもらった経験、本の選び方、学校図書館の利用状況、学校以外の図書館の利用状況や、大切な本や忘れられない本の存在、朝読書について調査結果を記載している。

第3章では調査結果のまとめを記載している。不読率等の説明、電子書籍の利用状況、学校図書館の利用状況などをまとめ、小中学校とともに、インターネット、SNSの利用が増えて、また、電子書籍の利用も増えているが、本を読む機会が減少傾向になってしまった。区としては、読書が身近な存在であり続けるよう、環境づくりと働きかけをしていくという形で結んでいる。

会 長 : 既に幾つか調査の結果についてやり取りも進んでいるが、事務局から説明があった調査の結果について、質問・意見があればお願いしたい。

委 員 : 本を読まない理由というのは結構重要なポイントかと思う。読みたい本がないからと、本を探すのが面倒だからが別の項目になっていて、数字が相当違うようには見えるが、分析すれば結構相

関は高いのかなと思う。むしろ本を読むのが嫌いだからという理由を選んだ子どもが半数くらいいるというのが大きな課題である。

司書や図書館の検索、レイアウトの工夫などで読みたい本が見つかるようにするとか、読みたい本が見つかりやすくなる工夫は、努力できると思う。問題なのは、本を読むのがもともと嫌いだという人たち、そういう子どもたちにどうアクセスするのかを工夫しないと、ここはいかんとしても変わらない可能性が高い。

例えば、ディスレクシアのお子さんとかも潜在的にはいると思う。活字を読むこと自体が非常に苦痛である、学校でも教科書を読むときにかなりつかえて読む、音声だと何も問題がないのにといいお子さんがやはりいらっしゃるので、先ほどオーディオブックの話も出たが、読み聞かせも含めた音声の活用も非常に重要である。潜在的に本を読むのが嫌いだというお子さんでも、オーディオブックとか、読み聞かせの機会があれば読むのかどうかという分析も必要で、そういうお子さんには手厚いサービスがきちんと届くようにする、そういうものがあるのだということを知ってもらおうというのも、本を読むのが嫌いだという生徒さんを少しずつ減らしていくことになろうかと思う。

読まない理由が幾つか挙げられている中で、改善できるところを探していくと、全体としては読書の価値を大人の立場からも子どもの目線からも改善していくことになろうかと思うので、これは非常に重要なデータと思う。

委員： 区の施設なので、学校図書室、図書館というのがアンケート対象になると思うが、出版社としては、書店、図書館というのが大事な取引先なので、書店に行きますかというところを聞いてほしい。習慣化という話をしたが、私の世代ではまちの本屋さんというのはまだまだ結構あって、小学生の私でも歩いて行ける距離に小さい書店があった。そもそもがまずは親の本棚から本を取って読んで、それで親に勧められて、1人で出歩けるようになって、半径10分以内ぐらい歩いて行って、書店が4、5軒あって、中学生、高校生になると電車にも乗ようになるので、小さい書店にない本を探していくという、そういう読書習慣から来る読書量の多さというのはあったと思う。

今、書店さんの経営が厳しく、まちの本屋さんはどんどんなくなっている。全国でも2万軒あったのが今は1万軒ぐらいである。そうすると、お子さんが電車に乗るようになるまでは1人で本屋さんに行けない状況で、ふらっと書店に行くことがない。もしそれが数字として表れていたら、やはりまちの書店さんを助け

にいかねばいけぬという話にもなると思う。まちの本屋さんとかターミナル駅にある大きい書店とか、そういうカテゴリーの妙案はないが、ぜひ知りたい。

文化振興課長 : 産業という部分の本屋・書店の視点も重要かと思う。アンケートを模索して行きたい。

委員 : アンケートとは外れるかもしれないが、関連して、書店のマップ、特に小学生と中高生が行くような場所のどういうところに書店があるかというの、もし可能だったらデータとして出していたらと検証するとき材料になると思う。

オブザーバー (商工観光課長) : 古書店連盟にどこの書店が入っているというのはある。ただ、古書を小学生が読めるかというところ、1つ1つの店舗についてどこに何があるというの、区としては把握していない。

委員 : 絵本とか子どもの本を扱っているところは、そういう本屋を紹介する本とかもあり、見れば分かるというものもあるが、それこそ自分の足で本屋に行ける子たちが行きたくなくなるような書店というの、こういった計画の中に巻き込んでいけると面白いのではないかなと感じた。

委員 : 渋谷区も大型書店がなくなって、駅中の書店も消えて、かなりシリアスな状態である。例えば本を買うときにあなただったらどうしていますかということや、書店が近くにありますかというような地域性を含めて聞いてみるのはどうか。本を買うということ、流通ということは非常に重要なポイントだと思う。

関連して、家に書棚がありますかとか自分の部屋に書棚がありますかというような聞き方も大事だと思う。要するに、箱がなければ本も入ってこない。昔のような普通にそこに図鑑が並んでいるという風景、百科事典が並んでいるとか、そういうことから様変わりしており、しかも紙の本はかさばると、親の価値観も随分変わってきている。そういう状況だとやはり書店に足を運ばない。図書館で済ませるのでもよいのだが、ネット通販を含めて新しい書籍をどんどん買っていくということはある程度推進していくことが必要だと思う。昔、ちょうど書店がどんどん消えていく中で「脳を創る読書」という本を書いたが、紙の本は決して電子書籍に圧迫されてなくなっていくわけではない。インターネットとか、活字離れでもない。そういうことを分析しながら、今年度、来年度の読書推進ということを実践的に考えていかねばいけぬかなと思う。

- 文化振興課長 : 古書店街で作っているマップは毎年更新されているものがある。神保町の辺りのものはあるが、新刊を出す書店のマップというのとはなかったか。
- オブザーバー (商工観光課長) : 古書店マップの中には、神保町地域の新刊を取り扱う書店も載せてくださっている。
- 委員 : 網羅されていなくても構わない。私の地元で子どもの読書の環境を考えると話題になるのは、書店が減ったことではなく、そもそもないということである。私の住んでいる町内には1軒しかないのだが、そういう状況の中で子どもと本をどうつなげるかを考えなければいけないということと比べると、まだまだ都会のいい環境が残っているので、そういうところを生かした推進計画になるといい。
- 文化振興課長 : アンケートについて、本を買う経験をしたことがあるのか、書棚をお持ちなのか、読書の環境の項目も検討したいと思う。
- 会長 : マップを作るのであれば、中高生とかを巻き込んで一緒に作っていくのも、まさに子ども主体の読書推進活動の1つになるのではないか。ただ、マップから書店が漏れていると、何でうち入っていないのだという話になりかねないから、ぜひそこは網羅していただきたいと思う。
- 委員 : アンケートに関していうと、他の自治体では、保護者の方のニーズや、保護者ご自身の読書の状況も聞いている自治体がある。学校、幼稚園、保育園の先生方にご協力いただかないといけないので、ちょっと負担になってしまうかもしれないが、これからの計画には保護者の意見もすごく重要だと思うので、もし可能性があるようであれば探っていただけたらと思う。
- 文化振興課長 : できれば、そのようにさせていただきたい。
- 委員 : 保育園ではコロナ禍を越えてから、保育園にある本の貸出しを再開した。そうしたら、皆さん毎日保育園の帰り、お迎えに来てからよく親子で関わって見ている時間がすごく増えた。
千代田区では、今、0歳児から18歳の千代田区の子どもたちがどんなふうに育ってくれたらいいかをまとめているので、そういう観点から千代田区の子どもたちをどう育てていくかというところもこの機会に皆様にお知らせできたらと思う。

委員： 前の月に読んだ冊数の項目で、小学生、特に10冊以上という子がかかなり多いことに驚いた。10冊読むのはなかなかだと思う。朝読書がどういう形で行われているのか分からないが、たくさん読むのが偉いという形での読書を行っているのであれば、冊数ではないのではないかなと思う。うちの子たちを見ていると、冊数を稼ごうとすると自分が読めるレベルの本よりも1段下げた、簡単で、易しいものになる。本当に彼らが楽しんでるかというところ、今、長男が読書家でよく本を読むが、ハリーポッターとかを読み始めるとなかなか読み終わらない。だが、それを読み通すことで自分がわくわくするという体験をしているのを感じるので、あまりたくさん読むのが偉いみたいな方向に、学校のスタイルとしてなっていくのは何となく逆効果なのではと思う。そのあたりどうなっているのかをお聞かせいただけるか。

オブザーバー（指導課長代理）： 千代田区における子ども読書の活動に関しては、そういったことがないように、先生方に指導等をしているところではあるが、どうしても数を目的としている子どもがいないということは、現状言い切れないと思う。私はあなたよりも何冊読んだから、という子はゼロではないと考えている。

会長： 全国的に見ていると、多読賞など学校で表彰をしているところもあったりするが、借りては返してを繰り返しているだけで、実は読んでいないのではないかと思うケースもある。学校としては、本に親しんでほしいという思いから取り組んでいるが、子どもにその考えが十分伝わっているのかというとなかなか難しい。

委員： 2点ある。1点目、予算的の推移などをお知らせいただけたらありがたい。ニュースなどで国全体として図書館司書に対する予算、教育に対する予算、その配分の公正性を問われるような記事を目にすることが多いので、千代田区の今回の事業の予算は年々増えているのか、これ自体に予算がつかなくても全体的には潤っているのか、予算がついたからどんどん読書が推進されているのか。現場の司書さんや学校の先生方が単に努力で子どものために何か残業してやっているとか、そういったことになっていないだろうかという1つ懸念もあり、金銭的なことを伺いたい。

もう1つ、先ほど指摘のあった本を読まない理由のところの、本を読むのが嫌いだからという小学生44.2%について、読むのが嫌いになったきっかけはアンケート結果にあるのか。

文化振興課長： まず、読書活動に関する予算としては、今、区が区立図書館指

定管理料という形で事業者を支払っている額が、昨年度で8億6
か7,000万円ぐらいである。そのうち、学校、保育園、幼稚園、
児童館に対して司書を派遣している金額が大体6,000万円程度
である。

アンケートのなぜ本が嫌いなのかについては、調査できていな
い。小学校1から3年生だと子どもたちが思いをどう発露できる
かを考えなければいけないが、4年生以上であれば聞けると思う
ので、年代を分けてどう聞けるのか考えたい。

委員： 1点目の予算のほうは、可能であれば推移を可視化していただ
けるとよい。書店業界がもちろん厳しいというのは、書店員として
日々体感しているところである。印刷費の高騰、製作費の高騰
がとにかく甚だしいということで、書籍自体のインフレ率もかなり
高い現状、そして全国的には貧困のレベルが上がっている。書籍
を買う余裕がご家庭にどれだけあるのか、10年後、日本が経済
的にどうなっているかというあたりもちょっと見据えながら、
短期的な視点、中期的な視点、そして長期的な視点をもって推進
活動をしていくと、全体のベネフィットにつながるのかなと思っ
た。

2点目の嫌いになった理由だが、例えば小さいうちに何冊読む
のが偉いといった表彰をされると、それで嫌いになってしまったり、
大人がやっていることが影響しているのであれば、ぜひ大人の
側から変わっていきたい。読みたい本がないから、本を探すのが
面倒だから、整備をすることできっとよくなれる。だが、嫌い
というのは何か理由があるのではないかなという気がした。

会長： そろそろ時間も迫っているため、発言をまだ頂いていない方
にご発言いただいて、締めくくりたいと思う。

委員： 3点ある。1点目が、子どもたちと本がどう出合っているか
である。アンケートの結果では、ほぼほぼ7割、8割が図書館や本
屋さんで自分で探すと答えている。たくさんの本の海の中から自
分でわくわくしながら本を探すということは、すごく豊かな経験
だと思うが、例えば電子書籍Yomokka!では、子どもたちが自分
でお薦めのランキングを作ってほかの子どもたちに共有をする
機能がたくさん使われている。今後の計画の課題にも書かれて
いる子どもたちが本に出合うための仕掛けづくりということで、
この割合を変えていくこともできるのではないかな。1人で本を探
すということしかできなかった子が、出会い方によって本を手
に取る機会を増やしていけるかもしれない。

読書によってどう変わったかというところについてもアンケートを取ってみたいのではないかと。子どもたちが本当に忙しい毎日の中で、遊ぶ時間をどう読書に振り分けてもらうか。何かする時間を削らなければいけない、何を削るか。何かとトレードで本を読む時間を作ったときに、もちろん本を読むという行動自体が楽しくて豊かでわくわくする行動だと思うが、なぜ本を読むのか。本を読むとどんないいことがあるのか。あまりぴんときていない子どもたち・保護者もいらっしやるかもしれない。本が好きでたくさん本を読む子どもたちやその保護者にアンケートを取って、自分が読書でどういうふうに変ったと思うか、お子さんが本を読むことでどういうふうに変容したと思うかを聞いてみていただきたい。

最後に、本を読むのが嫌いな理由はすごく知りたいところだ。弊社の提供している電子書籍サービスに戻ると、約4,000冊、36社の出版社のものが読めるが、その中のおよそ4割から5割が音声の読み上げサービスに対応している。明確にディスレクシアである、自分は文字を読むのがすごく困難だという自覚がない子でも、音声でも読めるのだと分かるとそれを使う子が結構いる。学校に見学に行くと、例えば画面を白黒反転させて読んだほうがより読みやすいという子もいるし、文字を拡大できたから読みやすいと気づけた子もいる。そういうふうに本人も自覚していないところで何か本が嫌いになる理由があるのかもしれない。本を読むのが嫌いな理由をもう少し掘り下げて調べられたらとてもいい。

委員： 不読率が16%です、4%ですと言われると、確かに何とかしなければいけないと思うが、果たしてこの場で目標とするのは不読率だとか読書の冊数ということでもいいのかという声は、私も実際にそうなのかなと思った。読書についての読書の好き嫌い、「好き」「どちらかというが好き」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」というのがあるが、これの経年変化もぜひ見てみたいというのが1点。

それから、資料4の中学生が「学校がある日によくすること」で、本を読むが7.4%となっており、これが非常に少ないと見えるが、この7.4%というのはアンケートでいうと2時間以上本を読む子ということである。毎日2時間以上読む子は、相当な読書量だと思う。これが15分以上だと見ると半数近くが15分以上本を読んでいるということになるわけで、毎日15分読む子というのも相当本を読んでいると思う。

もう一方で、テレビ、ビデオ、DVDの項目があるが、今どきビデオ、DVD見る子はいないだろうし、インターネットという単独

の項目も、ネットサーフィンを念頭に質問項目があるのかと思うが、例えば今の高校生、ちょうど私の息子が高2だが、スマホでゲームをやっている、友達からぴこんとLINEが来て、お前見てみろよこの動画面白いぞとってリンクを押してTikTokを数本見て、またLINEに戻って友達に返信して、何回かやり取りして、またゲームを始めるみたいな、そんなスマホの使い方をしている。今現在ここに上がっている質問項目が時代に合わなくなってきていて、例えばスマホを使うみたいな項目を作ったりするのもいいのかなとも思う。その細かいところや、どんなところがこの会議の目標になるのか、それから我々が判断材料としているこのアンケートの項目というのがどういうものかという話は、まとめてメールでお伝えしたいと思う。

委員： 2つほど。1つはお願いになるが、昨日、学校図書館の講演会があってお話を聞く機会があったが、コロナ禍で二極化が進み、読む子は読むのだが、読まない子は本当に読まなくなったという話もあった。確かにこういったアンケート調査だとか学校図書館の話をお聞きできるとそういったことを実感するわけだが、出版社の立場でいうと、実はコロナ禍で当初売上が少し上がった。学校図書館、公共図書館はじめ、利用できなくなった状況の中で、購入者が増えてという状況もあり、そういう状況が続けばより多くの子どもたちも本を所有でき、本が身近な存在になるのかと思いきや期待はしていたが、残念ながらそうではない。より本が身近な存在であるために、環境の整備をしていかなければいけないと感じている。

アンケート調査にもあったが、区がこういった形で学級文庫を運用しているのかが気になった。出版社の立場とすると図書費で購入していただき、置いていただきたいというのがあがるが、なかなかそういった状況にもないということであれば、リサイクル本、あるいは寄贈ということも考えられないか。なかなか運用的に難しいというのは十分承知しているが、学校図書館と合わせて学級文庫の環境整備をぜひお願いしたいと思う。

昨今、物価高騰——原材料費だけではなくて物流費もそうだが、今まで薄利多売でやってきた業界で、書店さんも減ってきて、業界自体を変えなければいけない。本は定価販売でずっと来ているわけだが、その部分を変えなければいけないということで、業界の中でも話があり、やはり本の値段を変えざるを得ない。私もここ2、3年定期的に見直しており、間違いなく今後本の値段は上がっていくと思う。学校図書館や幼稚園、保育園もそうだが、図書館の冊数を増やすことに加えて、1冊当たりの値段が変

わってくるところも併せて予算のところでお考えいただきたい。

委員：このアンケートを受け取った子どもたちというのは、アンケートに答えるに当たって自分の読書に対して振り返る機会になる。このアンケートとともに、読書することが、例えば自分の人生を豊かにする、読解力も上がる、読書するのはこんなにいいのだということや、そもそもなぜ今、この読書活動を推進していくのかということが分かる資料も添付しているか。

また、マップの話が出たが、ここに行けば本に出合えるといった情報を、低学年とかのお子さんにアンケートを配る際に一緒にお伝えしているか。

それから、ぜひ未就学施設の保護者向けにはアンケートを配るだけで意識改革にもなると思うので、考えていただけたらと思う。幼稚園でもいろいろと司書さんが来てやってくれているのに、うちの子自分で字が読めるのですと言って本人に絵本を読ませて喜んでの方が少なくない。やはり、どれだけ読み聞かせが大切かというのを浸透させていきたい。ぜひ低学年ぐらいまでは、保護者の方を巻き込んでいってもいいと思った。

会長：調査について様々ご意見頂戴したが、令和6年度の調査はこれから実施か。

文化振興課長：令和5年度は、調査をすでに集計中である。令和6年度のアンケートに委員の意見を盛り込みたいと思う。

会長：もし可能であれば、調査前に案を見せていただきたい。委員の皆さんからのご意見も頂きながら調査できると、この会議が設置された意義もより深まるのかなと思う。

文化振興課長：皆様に事前にご確認を頂きながら調査実施を考えていきたい。

会長：本日の議題は終了である。事務局に司会をお返すする。

4 連絡事項

文化振興課：第2回の会議は、3月21日木曜日、14時からの開催を予定している。詳細については、事務局から連絡する。

続いて、委員謝礼の支払いに係る書類は、会議の終了後、事務局まで提出いただきたい。以上をもって第1回子ども読書活動推進会議を閉会とする。